

諸人知之事故、氣の毒に見え申候。庄左衛門娘共も此事如何とて、其儀相尋候へば散々叱候に付、其後は誰も不申出候。杉江左衛門は母方のをひ、其上相口に付様子相尋候へば、庄左衛門打聞て、某存寄可申候。近年生類御憐と云事出来し、就夫狼を鎧にて突殺し候もの候て、色々御吟味候へども相知不申候に付、其趣公儀御届有之候て其分に罷成候。然所寺西孫九郎、屋鋪の垣腰へ狼來りしを突殺したるよし、五左衛門潜に承出し、幸ひ五左衛門組故、段々遂穿議候へば實真相知、其段達御馳候へば御知行被取上、改易に罷成候。是は何と申たる所存に候や。むかしに候へば孫九郎は御加増も可被下ほどの働きに候。幸に事濟候所に、密事を聞出し言上いたし、孫九郎身上を果し候。其心を察し候に、外より相知御尋に預候はゞ、其身可致迷惑との氣遣故に候。御咎も有之候はゞ無是非事、其時は自殺致し候へば御奉公に罷成候。か様の者に臨終なればとて、可致對面候や。又村上助左衛門はわかき時分より、元來博奕うちにて候處、某へ心安いたし候故、急度異見を加へ候へばすきと相止候故、奇特と存申通候。然處極老にも罷成て、近年こ

かしこにて碁を打候間には、かけにも打候を見聞いたし候。是はばくちにては無之や。是故此者へも暇乞は仕間敷と申候。左衛門承り、近頃乍尤氣の毒に存、或時かろく紙面に調べ、思召は尤至極に候へども、五左衛門同役の好故、毎日表へ相詰被申候。助左衛門も老人に候所、常に心安く存候故、是も毎日被詰候。内所へ相通し對面有之様に仕度と、書記しませ候へば打うなづき、可相通と申候に付兩人共通致對面候。扱無間死去仕候。杉江氏話

一、末森籠城の時奥村内室の働き

宮崎大貳は尾州額田の人也。今の長太夫五代の祖也。其子藏人瑞龍公松任御領知の時分被召出候。大貳は大力量の人にて武者修行し、何國にて相果候や死日も不知候。修行の時持ありき候鎧、子孫に相傳候。三間柄の鎧にて、大身の長さ壹尺四寸五分有之候。藏人以來一家の内、此鎧を容易につかふ者無之候。宮崎與左衛門は一家の内にて少し力量の覺有之に付、藏人家より申請候所、何とも手に不合、三尺宛三度すべて九尺柄にして、初て手に叶候よし。扱藏人松任城より末森の城へ加勢に罷越、令籠城候所に、天正年中

佐々成政急に取圍み、城の陥んとする事數度なりける時、高德公不日に御救被成、奥村・千秋等と一時に戦死をまぬかれたり。高德公御援兵いまだ相見不申前、城兵申合、兎角必死を覺悟無之候ては、いかでか此城を保ち可申やとて、大庭に火をおこし、奥村以下各先祖の系圖並由緒の筆記等、少も不殘其火へ投入焼捨申候。此時分城外には城中の水を絶し可然とて、城つゞきの山の腰を切絶、水すきと絶申候。然所に伊豫内室自身白米をもたせ出で、馬どもを並べつなぎ、髪をあらひすそなどをいたさせられ候。城外より見候へば水の様のみえけるとなん。宮崎長太夫話

一、刀脇指目釘の事

戸田清太夫刀脇指目釘の事、常の指料にも二所目釘也。赤銅にて目釘穴に應じ候ほどの、ねちがねの臺を收置、目釘も赤銅にてねちがねにて留置候。柄の木は皆柚の木を用ひる也。其故其堅固なる事、比倫すべきなし。或人此事を聞て訝りて云様は、數度の戰場へ出て、鬪諍にも及し刀を見けれども、多くは竹の目釘也。竹に好惡の有事は誠に吟味すべき也。但竹よりも堅固にて、一度打て二度とぬけざる目

釘の製二色あり。秘密の事にして容易に人に不傳候へども、右ねちがねを是とする事の口惜く存する故傳授すべし。疑敷思召候はゞ、先づ扇子の要に拵見て可心得事也。其製法は鯨のひげを能吟味し、其目釘穴へ打入、兩方共壹分許のこし置、その兩頭を焚こがしぬれば、鯨の頭の様に成也。扱其頭をみがき置けば見分もよろしくみゆ。若又ぬき申度時は、小刀にてかたゝの頭をけづり去りて抜けぬけぬ。今一色は世間にも申傳る通に、大なるなめくじりの干たるを、目釘に用ゆ。是も兩頭を焚こがしぬる也。ねちがねの目釘、恐くは打合候時、はずみて却て折れくじけぬべしと云へり。尤成事と存書記ぬ。

一、三壺記といふ記録(一)

俗間に三壺記と云記録ありて、御國の故事、御先祖様の事等載置たり。三壺何某と云者作れるよし聞傳候處左にはあらず。山田四郎右衛門と云御臺所足輕の作也。山田事微妙公以來二十四俵被下、八十六歳にて元祿年中に相果候。男子無之、女子候て婿子山田久八と云者と一所にいたし候。此久八へ先年御尋被成候は、四郎右衛門儀三壺記を作り板行